

日本の貨幣の歴史

貨幣博物館 2024 3.23

貨幣の金属

貨幣には、紙幣と硬貨があります。紙幣は紙に模様や文字が印刷されているだけです。それ紙幣自体には価値はありません。しかし発行元への信頼感があれば、ものやサービスに交換できます。紙なら持ち運びも貯蔵にも負荷はかかりません。一方貨幣は金・銀・銅が選ばれます。重いしかさばります。しかし、金や銀ならいつでも相当な価値で交換できる安心感があります。鉄やアルミニウムが使われる場合もありますが、低額貨幣や銭として使われます。

古今東西、金銀銅が通貨の素材になぜ選ばれてきたのでしょうか。耐久性、加工性、実用性から考えてみましょう。

まず耐久性です。金銀は美しい光沢があり、腐食に強く錆びにくい特徴があります。燃えませんし、備蓄に適してきました。

次に精錬や加工が容易なことです。金銀銅は前近代的な設備・操業でも金属精錬が可能です。金銀銅は、簡単に打刻や打延ができます。

最後は実用性がなく、需要の変動が少ないことです。金銀銅に実用性がないとは意外かもしれません。金銀は柔らかく農耕具には使えず、通貨以外には装飾品しか使えません。

もっとも現代では半導体や電子産業には欠かせませんが、そこそこ希少なので貨幣以外には装飾品くらいしか使いみちがありません。道具をつくるなら鉄が最適です。

貨幣の日本史での用途

貨幣と聞くと、民のため、産業のため、物品流通のための手段と現代的な感覚をもちます。しかし日本史を金属貨幣の視点からみると、貨幣の歴史には様々な意図が含まれていたことがわかります。

日本の古代は都の建設のため国産の銭が作られ、中世は中国からの輸入の銭に頼り、戦国時代には石見銀山のゴールドラッシュならぬシルバーラッシュで世界経済を動かし、江戸時代は財政難に苦しめられた貨幣政策の道具となり、明治以降の日本帝国のを支える通貨政策の一環と、日本史とともに貨幣は役割と責任をかえつつ歴史を動かす日本が活動するための血液でありました。

日本史は、単純に英雄や外敵が歴史を動かしたわけではありません。周辺国、とくに中国の施策に依存し、地球環境の寒暖差の変化の影響をうけつつ、我々が知っている日本史が展開されます。日本史での出来事が、決して必然ではなく偶然の要素を多いことが、金属貨幣の歴史から見えてきます。

無文銀銭が登場した七世紀から江戸時代までの日本史を、金属貨幣とともに駆け抜けてみましょう。

国産以前の金属貨幣

国産の金属貨幣の製造以前に使われていた銀貨のお話をします。
七世紀後半は日本の気候は寒冷期です。

7世紀 = 寒冷期

660年代天智天皇の時代、朝鮮半島新羅からもたらされた貿易用の通貨が使われました。銀板を打ち延べて作られたの「無文銀銭」です。表面に何も刻印されていないものが多かったので無文と言われました。

富本銭

683年天武天皇は、先代に流通していた「無文銀銭」の使用を禁じました。天武は天智とは一味違つてという政治パフォーマンスでもありました。代わりに銅銭を使うよう命じます。これが、現在確認できる最古の国産の銅貨、富本銭です。飛鳥地方で製造された富本銭は、銅・アンチモン合金でした。鑄型や鑄棹などにくっついた状態で七世紀後半の地層から発掘されています。

702年施行の大宝律では富本銭の私造を禁じました。銅銭を発行した理由は藤原京の建設物資の購入や建設労働者の労賃をこれで支払った可能性があります。富本銭は、まじないや祭祈のためのものという説もあります。流通したのかも定かではありません。しかし、国家により鑄造された銅銭であることは間違いありません。

和同開珎

八世紀は奈良時代、平城京遷都や東大寺大仏造営の時期です。温暖化が始まっています。元明天皇時代の708年に銀貨と銅貨が発行されました。「和同開珎」です。和同開珎銀貨は、流通していた無文銀銭を回収して作りました。和同開珎銅銭は、初期の頃は富本銭と同じく銅・アンチモン合金でしたが、やがて銅・錫合金の青銅に変わります。

和同開珎の発行も記念硬貨などではなく、平城京の建設などのための物資の購入や労賃の支払いに用いるためでした。銀銭は翌年に廃止され、銅銭に統一されました。租税の調は銅銭で支払うことも可能で、朝廷へ銭を納めた者に位階を与えたり、銭を持っていることが地方官の任官条件になったりしていました。

皇朝十二銭

和同開珎以降、十世紀まで朝廷が発行した銅銭を、「皇朝十二銭」と呼びます。青銅製だけでなく金製や銀製のものもありました。

藤原仲麻呂は、760年、銅銭の「万年通宝」、金銭の「開基勝宝」、銀銭の「大平元宝」の三種の銭を発行します。平城京の改造工事費用の支払いと、新羅出兵のための軍事費の調達のためでした。

765年に「神功開宝」が発行されます。新政権の告知と、西大寺の建設費用調達のためです。

782年桓武天皇は「神功開宝」の製造を停止します。しかし長岡京の建設費用調達のために、790年に製造が再開されました。

ここまでのお話しで、国家予算の増大やビックイベントのためには、お金が必要です。そのために、国が貨幣をつくり資材や労役を調達した構造は、なんだか日本国債とのアナロジーを想像してしまいますね。

八世紀末から九世紀は、平安時代の平安京遷都とその建設の時期です。

794年の平安遷都の後、桓武天皇は796年に「隆平永宝」を発行します。平安京の建設費用調達と政治PRのためでした。

818年「富寿神宝」が発行され、835年、承和二年に「承和昌宝」が発行されます。「承和昌宝」は日本で初めて年号を刻印した銭です。「和同開珎」があるじゃないかとお思いの皆さん、「和同開珎」が発行された年号は和銅です。発行目的は、平安京造営の費用調達でしょう。

十世紀は、平安時代の第二コーナーです。寒冷化が進展してきました。

907年醍醐天皇の時代に「延喜通宝」、958年村上天皇の時代に「乾元大宝」が発行されます。

このころから貨幣の発行はなくなります。銅生産が不調になったためと大規模建築やビックイベントがなくなったため、貨幣発行の必要がなくなったためです。

国産貨幣のない時代

11世紀 = 温暖化

十一世紀は、平安時代の第三コーナーです。日本は温暖化が進展しています。国は潤い、藤原道長と平等院鳳凰堂を建立した頼通らによる摂関政治が最盛期を迎えます。

貨幣はつくられず、十一世紀後半に、宋が発行した青銅銭が国内を流通し始めます。

十二世紀は、平安時代の最後コーナーで、鎌倉時代の始まりでもあります。

白河院、鳥羽院らの院政の後、平清盛が実権を握ります。清盛は積極的に中国との日宋貿易を行い、宋が発行した銭「皇宋通宝」を輸入します。1160年以降、南宋は、中国北部の金王朝との戦争費用調達のため、紙幣を発行し、余った中国内の銭を輸出しています。

十二世紀前半は、温暖な気候であり、東北平泉の奥州藤原氏を繁栄させ、中尊寺金色堂を建立させます。

十二世紀後半は、一転して寒冷化で農業不振に陥り、源平合戦が繰り広げられました。

十三世紀に入ると、南宋は対モンゴル戦争に使う火薬の材料や船舶の木材などの軍事物資を日本から輸入するために、余った銭を輸出します。この頃の日本の貨幣を含む青銅製品の原料のほとんどが中国華南、南宋のものでした。

十三世紀は朝廷、鎌倉幕府ともに、平氏政権と異なり銭の使用に消極的だったため銭は発行されず、輸入銭まかせでした。

十三世紀火山の大規模噴火が地球レベルで頻発し、日射量が減った時期でもあり、日本でも農業不振で飢饉が頻発します。

1274、1281年に元=モンゴル帝国は日本に侵攻します。文永の役、弘安の役です。2度の元寇とはほぼ同時期に、中国から中国銭が日本に押し寄せます。元も中国国内での銭の使用を禁止し、紙幣政策をとったため、中国南部で使わなくなった銭が流入してきていたのです。

一五世紀は、室町時代です。日明貿易・外交に積極的な足利義満らの時期でもあり、院や公家といった朝廷勢力が室町幕府に影響力を示しました。

一五世紀後半には寒冷化が歴史上日本史上のピークになり、農業危機、飢饉が慢性化します。貨幣は、民間の模造銭が生産され、九州や東北で使用されました。国内の銅の生産量も輸出するまで大きくなります。そんななか銭の輸入も続きます。一五世紀の銭の輸入は、明と日本の幕府や大名らによる勘合貿易によるものが大半です。しかし、その銭輸入も1460年以降急激に減少します。

11世紀 銭発行なし ↓ 15世紀

宋銭

元寇

元が来ると同時に中国銭輸入

室町幕府も貨幣を発行しませんでした。民間が銭を模造し、銅の国産が再開していますので、銅素材も技術も揃っていました。しかしこれまでのように、政治的PRや造成などビッグイベントのなかった室町幕府は、貨幣をわざわざ発行する必要がなかったのかもしれない。

この頃流通したのは、中国明朝の第3代皇帝永楽帝の時代から作られていた銅製貨幣「永楽通宝」です。永楽通宝は、江戸時代まで日本国内で流通します。

三貨制度

一六世紀から一七世紀は、中世から近世へ移行時期にあたります。

これまでは、金属通貨は青銅貨だけでしたが、この時期に金貨や銀貨が加わります。金貨、銀貨、青銅貨を使う制度を「三貨制度」と呼びます。各々の貨幣を交換する際の枚数比を決めて運用する制度です。現代でいうと百円玉で十円玉十枚が交換できます。この制度の最初が三貨制度です。

無文銭と銭の輸出

この頃は、中国の模造銭の製造以外に、何も文字の刻印していない「無文銭」が作られ始めます。錫が国内で採れなかったため、青銅貨ができず、銅品位の高いものは文字が不鮮明になりやすいため、最初から文字無しで銭を作ったというわけです。

1540年代になると、中国からの銭の輸入が活発になってきます。中国の銭の価格が下がり、日本では銀が増えてきて銀安銭高になったためです。日本は銀を輸出し銭を輸入して利益を出します。今の日米の円ドル為替と全く同じ構造です。

やがて中国からの銭の流入が減ると、国内で模造銭や無文銭の生産が進みます。この銭の生産技術が江戸幕府の銭発行につながっていきました。

シルバーラッシュ

この時期は、ゴールドラッシュならにシルバーラッシュが世界的に起こりました。ヨーロッパの独国のフライベルク銀山など、南米のポトシ銀山、そして日本で、世界的には銀の大増産の時期になります。

日本では、世界遺産にもなった石見銀山の開発です。1520年代、博多の商人や出雲の銅山経営者が協力して開発されました。以前から、出雲では鉄と銅が取れていました。鉱山の経営者と商人が協力すると資本投入が可能になり、初期投資が大きな銀鉱山の開発が進みました。

この頃、銀精錬の新しい精錬技術である「灰吹法」が朝鮮半島から伝わりました。灰吹法は、最終精錬で銀と鉛化合物から鉛だけを除去し、銀を得る方法です。これで銀精錬の生産性が一気に増大します。石見銀山で開発された採鉱・冶金術は、生野銀山など他の地域まで広がり、結果として銀の供給量が増大します。

この時期、銀の供給量増大も大きかったですが、金の増産も起こり、銀の値段が下がることになります。

中国は、税金を銀で納める税制をとっており、相対的に銀の需要が増えて、銀高金安でした。ということは、日本は中国からの金を輸入し、銀を輸出することになります。

日本が銀輸出国になっている事態は、中国近隣の日本で銀を得て、その銀で中国との貿易の支払いをするというビジネスモデルが西洋人目覚めます。商人だけでなく、鉄砲や宣

日本には金貨があまりないから銀を売って...

江戸幕府の断

中国

教師が日本に押しつけてきたのは、ひとえに銀を得ようとする目論見からではないでしょうか。1571年ポルトガル商人は長崎に来航しマカオルートを開きます。

ライバルのスペインは、1571年、フィリピンにマニラを建設し、メキシコ西岸のアカプルコとの太平洋定期航路を開きます。これで、南米ポトシ銀山の銀が中国に運び込まれるルートができます。銀が大量に流入してきた明国は1570年代で一気に銀経済に変化していきます。結果として、日本の銀と南米の銀とが中国で競合することになりました。

太平洋航路、大西洋航路、インド航路の3つの航路は開通は、この時代の経済のグローバルネットワークを構築しました。その一角を担ったのが日本の石見銀山でした。

ビター文

信長や秀吉は、銭を発行しませんでした。しかし民間では永楽通宝での取引が行われています。銭とり引きをする際、その銭がどれくらいの価値があるのかを決めなければなりません。それで健全な銭を基準銭とし、欠けたり割れたりした銭を減価銭と呼びました。減価銭が数枚で基準銭1枚という具合です。この減価銭のことをビタといいます。やがて減価銭が基準銭、1文になります。「ビター文まからない」の語源です。

金山銀山

秀吉は、金の茶室を作ったり、配下の大名に金銀を与えたりするなど金銀を大いに利用しました。このため豊臣政権では、全国の金山銀山を独占しました。しかし完全に直轄にしたわけではなく経営はまかされており、産出の一部を税で納めるという方式でした。

豊臣政権が金銀を独占した理由は、朝鮮出兵の軍事費用の捻出のためです。金銀を町人に貸付け利子を金銀で支払わせる方式で軍事費を稼ぎます。そして兵糧や火薬や弾丸用の鉛などの国内調達や輸入に、銀塊を使います。朝鮮王朝を支援した明も銀貨で軍事費を支払いました。この時期の東アジアは経済に銀貨や銀塊で経済が使われる現象が起こっていました。

大判・小判のプロトタイプ

秀吉が活動した1570年から1590年は、金塊が取引で使われた時期です。ただまだ金の塊であって、品位もまちまちでした。取引のたびに秤量したり含有率を鑑定したりする手間がかかりました。

ここでようやく、金の重さや含有量を規格化する動きが出てきます。定形の金の延べ板が作られ、そこに金の含有量を書くようになります。これで支払いをするということは、金が通貨として機能することになります。「天正大判」という金貨があります。1578年にはすでに存在した、縦14センチメートル、横8センチメートルの世界最大の金貨です。これは秀吉の発注ということですが、京都の彫金師後藤家が作成しました。ただこの金貨は流通のためではなく、贈与としての意味合いでした。

江戸の貨幣制度

十七世紀は江戸幕府の成立と確立の時期です。この時期は寒冷化しが進みましたが、海水面が下がり干拓地が激増します。戦争がなくなったことと相まって、農業生産が爆発的

に拡大します。職業の役割分担も進み、物流ネットワークも整備されます。こうなるとしっかりした貨幣体系が必要になります。

1601年家康は、金貨・銀貨として「慶長金銀」を発行します。金貨である慶長金は、「慶長小判」や「慶長一分金」です。十六世紀までの金貨は、贈答品や恩賞の意味合いがりましたが、慶長小判は大量生産で、かつ取引に活用する目的で発行されています。当時の東アジアでは銀貨が通貨でしたが、そのなかで金貨を発行したの異例でした。

江戸幕府は、慶長金銀を流通通貨としました。灰吹法で作った灰吹銀を回収し慶長銀に作り変えます。しかし必ずしも全国に広がったわけではありません。関西では銀貨、関東・江戸では金貨が使われました。西には銀山があり、国際貿易の通貨は銀貨でした。東には金山がありました。東西で通過貨幣の種類が異なる状況は、両替商の発達を促しました。

三代将軍家光の時代、1635年には日本からの海外渡航を禁止し、1639年にはポルトガルとの通商を断り、鎖国が完成します。1636年寛永年々間約に、幕府が青銅銭「寛永通宝」を製造し始めます。江戸時代を通し、銭といえば寛永通宝が使われることとなります。

銭は、全国各地に銭座を設置します。請負業者を指名し、期間限定の銭座を委託したのです。一方、金座や銀座は固定です。銀座は、現在の東京銀座。金座はあちこち移動しますが最終的には現在の東京の日銀本店の場所に置かれました。

江戸の輸出品としての金貨銀貨

江戸時代は鎖国のイメージが強いですが、人的な交流では日本人の海外渡航はできず、キリスト教信仰を禁じたため、オランダなどの一部の国しか受け入れません。しかし、経済面では大規模な額の貿易が行われ、海外の物産を購入しました。貿易の相手が求める日本の物産はなく、求めたものが金貨や銀貨でした。つまり通商貨幣としてではなく、交易物品としての金貨銀貨が輸出されました。輸出入の金貨銀貨の選択は、日本国内が金高銀安か金安銀高かで変わり、輸出先の金銀の価格も影響しました。

日本国内は、金山銀山が開発され、金銀が潤沢に供給されましたが、生産量の増減や貨幣需要の変動で輸出金貨や銀貨が決められたり、年間輸出額を限定したりしました。

銅貨である銭、寛永通宝も同様に輸出に使われました。金銀は西洋や中国が輸出相手でしたが、銭は東南アジア向けです。銭の場合も銅山の生産量の増減により、銭の輸出量が変動しました。

このように書くと、江戸時代も現代も全く同じ輸出輸入も構造になっていることがわかります。

貨幣改鋳

江戸時代は、将軍が変わると、金貨銀貨の改鋳がありました。また、特に飢饉のあとに多かったのですが改革の資金源として金貨や銀貨の改鋳がなされました。回収した金貨や銀貨を、より品位の低い悪貨に改鋳し利ざやを稼ぐ方法です。ここからは、色々な本にもでていきますので、ご自分で探してみてください。

輸
入
交
易
品